

# 戦時の沈没船 記録後世に

## 水中写真や資料 データベース化

太平洋戦争で海底に沈んだ旧軍の軍艦や引き揚げ船などの記録を水中写真付きのデータベースで残そうと、NPO「水中文化財環境調査協会」(千葉県市川市)が、終戦記念日を控えた七月下旬に小樽沖で活動を始める。戦争を繰り返さないよう平和利用に役立てる。

同協会代表で水中写真家田中正文さん(四七)は「同市在住」は二〇〇二年、パラオでサンゴ礁に沈んでいた旧軍の軍艦群に出会った。

「船はもちろん、鉄かぶとや軍靴も残っていて沈没の瞬間を想像できた」と言い、「南洋の楽園の美しい部分ばかり撮ってきた。戦争の犠牲者に思いが至らず、写真家として恥ずかしい思いがした」。

以来、戦争で海に沈んだ艦船二十一隻、航空機十機を国内外で撮り、写真集も出版。昨年五月、山口県沖に沈む戦艦「陸奥」を初調査したのを契機に八月

## 専門家らNPO設立／まず小樽沖で調査へ

に同協会を設立した。会員は田中さんをはじめ、軍事史、海洋生物学、文化人類学などの専門家を含む約三十人。艦船の大きさ、被害や沈没の状況、艦内の様子などを資料として蓄積する。撮影は、生身の人間が直接戦争を感じたい」との思いから、田中さん自ら特殊器具を使って潜る。遺骨や遺品が見つければ遺族に届ける。

小樽沖には商船「真岡丸」(一、二二九ト)が沈む。一九四五年十二月、進駐軍の指令で爆弾の海中投棄中に誤爆で沈没、約八十人が亡くなった。小樽に近い洞爺湖で、環境調査をしていることから活動の皮切りとした。

最終目標は終戦直後、留萌沖で旧ソ連の潜水艦の攻撃に遭い、沈没した樺太(サハリン)からの引き揚げ船三隻。「千七百余人も民間人が犠牲になった。命ある間に調査したい」と力を込める。



「太平洋戦争で沈んだ艦船などは約3千隻。記録に残したい」と語る田中さん